



木下恵介記念館 No.15 2015.9.1 発行

# 栄町だより

Keisuke Kinoshita Memorial Museum

公益財団法人 浜松市文化振興財団  
発行：木下恵介記念館  
〒432-8025 浜松市中区栄町3番地の1  
TEL&FAX 053-457-3450  
E-mail : kinoshitakan@hcf.or.jp  
http://www.hcf.or.jp

## 木下恵介監督映画『この子を残して』 長崎県佐世保市針尾島に出現した大オープンセット

この映画は、ローマ法皇パウロ2世の核廃絶の演説に感動した木下恵介監督が、長崎で被爆して療養生活のあとで亡くなった長崎大学医学部・永井隆博士の手記「この子を残して」をもとに製作した作品である。

“核廃絶”をテーマにしたこの作品で、原爆投下の瞬間とその惨状のシーンは絶対に欠かせないため、木下監督は「原爆投下前後の長崎浦上一帯の忠実な復元」ができなければ、この映画は成り立たないと考えていた。

そこで、東洋一のロマネスク教会建築といわれた旧浦上天主堂や永井博士宅を含む当時の浦上上野町の家並みのオープンセットを建設することが決定した。これを指揮したのが映画美術監督の芳野尹孝氏である。

そして、この建設地となったのが、長崎県佐世保市郊外の針尾島（現在のハウステンボス町）である。幸いにもこの映画は長崎県の推薦映画となったことから、当時の後楽園球場 19 個分の広大な土地の確保にも長崎県の協力が得られた。

さて、木下監督の拘った「忠実な再現」にあたり、一番苦労したのが旧浦上天主堂であった。旧浦上天主堂は、明治21年にフランス人神父の指導で着工、多くの信徒、職人達が1枚ずつ煉瓦を積み上げ昭和初年完成したもので、長く信仰の象徴となっていた建物である。しかし、手造りのため設計図等の資料はなく、わずかな記録をもとに復元していくしかなかった。

また、この作品の舞台となる長崎市浦上一帯も、すでにビルや住宅が建ち並び、当時の街並みは失われていた。残された資料をもとに、旧天主堂を取り巻く当時の浦上上野町一帯の忠実な復元が試みられた。かつて、この一帯の宅地や畑は切石積みみの石垣で区画されていたこと、上野町にあった永井家は広い土間をもつ大きな二階建ての農家で、旧天主堂と永井家はほぼ同一レベル上に建てられていたこともわかった。しかし、このオープンセットでの26mの双塔の旧天主堂は高すぎるため、遠近の効果も考えて2/3縮尺にし、それに合わせて浦上一帯の集落の位置を天主堂より低くし、集落から天主堂を仰ぎ見るように工夫がなされた。

工期5か月総工費1億5千万円、芳野尹孝氏も驚くほどの大オープンセットが完成し、撮影が開始された。苦勞の末に完成したオープンセット

は、原爆投下以前のシーンの撮影が終わるや、原爆投下と直後の様相へと一変する。広大なロケ地の先1km圏内に絶対立入り禁止の厳戒体制を敷き、約800箇所に仕掛けられたダイナマイトによる爆破が緊張した秒読みの末に行われた。無残に破壊された旧天主堂と瓦礫の山、上野町の集落をはじめ一帯の一木一草まで焼き払い、1945年8月9日長崎浦上に起こった地獄絵図が再現された。

オープンセット建設を指揮した芳野尹孝氏は「この映画は実在した人物を描いた作品であったため、物語の舞台はすべて昭和20年代に実在した場所で、架空の舞台は1カ所も登場しない。したがってセット各場面すべてに忠実な復元が要求された。本来の映画美術の造型表現が第二義的なものとなってしまったが、旧浦上天主堂を自分なりの解釈で復元し得たことは大きな喜びだった。

(1986.7 公益社団法人日本建築士会連合会発行「建築士」)と当時を振り返っている。

なぜ、木下監督は、この作品で徹底的に「忠実な再現」に拘ったのか。かつて、木下監督はパリ長期遊学中に、アメリカの広島・長崎への原爆投下について、現地の新聞記者の質問に、「原爆投下が戦争終結を早めた」と答えている。これを聞いた記者は、たぶん木下監督を原爆投下肯定論者と解しただろう。後に、木下監督はこのことに触れ「当時そんなふうに思ったことに間違いないのだけれど、原爆そのものは是非には、別の厳しい判断もあって、それが長年に渡り、胸の奥に蟠っていた。(論創社発行長部日出雄著「新編天才監督木下恵介」)」と語っている。

木下監督は、“嘘”は大嫌いだったという。また、黒澤明監督の「原爆映画は、被害者以外は他人事だ。客なんか来やしない。」と反対意見への反発心もあっただろう。しかし、常に人間への願いを込めた映画をつくってきた監督として、何よりも被爆国日本の一人として、かつての自らの発言への悔やみの念を持ち続けていたのではないかと。木下監督はこの作品を通じて“30年来の胸の奥の蟠り”を取り払い、あらためて自らの立ち位置を明確に示すため、一切の妥協を許さず、この大オープンセットにも「忠実な再現」を徹底的に要求したのではないだろうか。(館長 原田昌典)

# 上映作品

## の余韻

終戦 70 年特別企画上映会  
1944 年公開作品『陸軍』  
1983 年公開作品『この子を残して』

### 私の心に留まった “ワンシーン”

〈館長 原田昌典〉

1944 年公開の『陸軍』は、田中絹代扮する母親が、出征隊列の行進に愛する息子の姿を見届けようと、涙を流しながら人混みの中をどこまでも追っていくラストシーンはあまりにも有名であるが、敢えてこのラストシーン直前のシーンに注目してみたい。出征する息子を見送るつもりがなく、家の拭き掃除などしていた田中絹代が不意の目眩に、ひょっとしたら長生きできず、息子と最後の別れになるかもしれないとの思いが心を過る。その思いを振り払うかのように軍人勅諭五箇条を暗唱し、軍国の母としての我を取り戻そうとするが、聞こえてきた進軍ラッパにはっと立ち上がる。書庫の扉に書かれた「大日本史」の文字と物干し竿の四代続く店の暖簾から田中絹代が行こうか行くまいかと思ひ迷う姿へと映像が移る。この時の田中絹代は「大日本史」と暖簾のある方に向き直って姿を消すが、カメラはそれとは反対に母親の本心を示すかのように左へと流れていく。この後右からフラフラと田中絹代が外へと走り出す(右写真)。このラストシーンへと繋がる母親のゆれる心情を表現したこの緊迫感あふれる濃密なシーンが心に留まった。



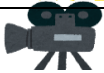
©松竹 1944

1983 年公開の『この子を残して』のラストシーンは、木下恵介がこの場面にかけての意気込みが十分に感じられる迫力あるシーンであるが、それよりも原爆投下の悲惨さは、その後の焼け跡のシーンのほうが強く受けた。祖母と孫が初めて焼け跡の家を探るシーン(左写真)で、カメラが取り込んでいく悲惨な光景は、原爆投下前の家々のたたずまいを見ているだけに、胸に迫るものがあった。そして、この作品で注目したシーンは、大竹しのぶの告白のシーンである。彼女が学校の教師を辞めて修道院へ入る決心した動機を語る長回しのシーンである。ちょっと引いたカメラで、あの長ゼリフの間、彼女からは目が離せなかった。彼女のセリフと演技だけで、あの凄まじいラストの映像に匹敵する原爆投下時の悲惨さ、無差別爆撃の非人間性が痛いほど伝わってきた。



©松竹 1983

### 上映予告



### 9月～11月のイベント案内

9月～11月の館内月例上映会では、次の木下監督作品を上映します。また、11月28日(土)には、特別企画として、「映像による都市・建築表現」をテーマに、小野淳氏(建築家・浜松都市建築映像研究所代表)による講演とワークショップ・作品上映会を開催します。※詳しくは当記念館イベント案内をご覧ください。

#### 9/20(日) お嬢さん乾杯

上映 10:00～・14:00～



原節子が出演した唯一の木下作品。没落華族令嬢と成金男の不釣り合いな恋を描く。

#### 10/18(日) 女

上映 10:00～・14:00～



©1948 松竹

登場人物たった2人のオールロケ作品。元情婦と強盗犯の男の逃避行を描く。

#### 11/15(日) 檜山節考

上映 10:00～・14:00～



©1958 松竹

深沢七郎原作の姥捨て伝説を舞台的手法で映画化。田中絹代は自ら前歯を抜いて撮影に臨んだ。